

個人レポート

上代自主ゼミ文学散歩レポート

下総国分寺

足立 祐美

雨の降り続ける中、バス停の脇の坂道を進んでいくと、下総国分寺跡に着いた。門をくぐる際に、軒下に貯まる水に雨のしずくが入り込んで音をたてる。境内を中心として佇む空間には、小ぶりになったその雨音をひっそりと吸い込むような静けさがあった。

下総国分寺は天平十二年（七四〇）に聖武天皇の詔により建立された国分寺の一つである。当時の律令制下においては、全国を国・郡・里という行政組織に編成し地方の支配を行っていた。そのうちの国ごとに置かれた役所を国府（国衙）といい、中央から国司が派遣された。また国府を中心に仏教を広めようとする政策から、周辺には国分僧寺・国分尼寺が建立され地方行政の中心地としても整備されていた。

下総国分寺の造営は段階を踏んで行われたことが明らかになっている。まず金寺『金光明最勝王經』を安置する七重の塔の建設が先行して着手され、後に本格的な造営に移行したようである。これは国分寺建立の詔の中で、七重塔が最も重視されたことをしめしている。

全国でも珍しいのが、法隆寺式伽藍配置が採用されていることと、文

橋本 尚子 足立 祐美
市塚 あゆみ

様瓦に宝相華文が使われていることである。

特に宝相華文を国分寺の中でまとまって使用しているのは下総国分寺のみである。宮都や多くの寺院で流行した文様は蓮華文と唐草文を組み合わせたものであった。宝相華はイバラ科のボタンバラといわれているが、宝相華文はこれとは関係なく、隋・唐の時代、中国で創作された文様のことをいう。その製作にあたっては、工人が国分寺近くに集められ、膨大な量の瓦つくりに従事したと考えられている。こうした軒先瓦の文様や瓦をつくるときの組織の編成のあり方は都色の強いといわれる上総国分寺とも大きく異なっていた。

宝相華文の他にも遺物は出土している。中でも、寺の性格を表す「尼」「尼寺」の墨書土器は、僧寺からも出土し、両寺の間で日常的な交流があったことをうかがわせる貴重な資料となっている。尼寺の造営は、僧寺より少し遅れて着手された。伽藍中心部は金堂と講堂を南北に置き、それを板塀や溝によって区画したのみで、非常に簡略化された構造が特徴的である。僧寺とは北西に隣接している。

このように、下総国分寺は伽藍配置や建物構造、さらに採用された瓦の文様にも地域色があらわれている。天武天皇以後の中央の仏教信奉の政策が諸国共通の行事を重ねてきたのに対して、諸国がどのように反応

したかについての詳細は不明である。しかし、こういった、隣接した国であっても大きな相違があったことは、各国分寺の造営が独自に進められたことを物語っている。

市川を巡って

市 塚 あゆみ

今回、私たちの自主ゼミでは、市川市周辺の文学散歩を行いました。市川市考古博物館、下総国分寺跡、手児奈霊堂などをまわりました。私は、その他に訪れた、堀之内遺跡と須和田遺跡の説明をしたいと思います。

昭和三八年、戦後の本格的な国の指定が千葉県の中で最も早く行われたこの堀之内貝塚は、いままでに無数の発掘が繰り返され、出土した遺物は全国に散逸していきました。土器にいたっては、一九四〇（昭和一五）年に「堀之内式」と名付けられ正式に土器型式となり、縄文時代後期の標式土器となっています。貝層化からは、縄文時代後期初めの居住跡が発見されており、探査の結果から広場のような空間であったと考えられています。そのような場所に暮らしていた人々が食料として食べていたものの中に、軟体動物頭足類のコウイカ・コブイカ、そしてイカの甲羅があります。市川市の他の貝塚でイカの甲羅は珍しいので、産卵に適した藻場が近くにあったということになります。出土した他の貝類や魚・獣骨からも、遺跡周辺の豊かな自然が予想することができます。また堀之内貝塚から発見された縄文時代の人骨が、確実に十体見つかっています。調べれば調べるほど興味深く、貝塚文化においても重要である

う堀之内遺跡。隣接地の市立市川市考古博物館とあわせて、行ってみる価値は十分にある貝塚であることは間違いありません。

須和田公園に着くころになると雨も上がり、公園内には夏を知らせるセミの鳴き声が響きわたっていました。須和田遺跡は真間山の大地から東に延びる、須和田大地のほぼ中央にあり、台地上は現在小公園となっています。弥生文化を一番はやく受け入れた遺跡の一つであり、奈良・平安時代に比定される真間式土器や国分式土器の標式遺跡（考古学上、形式や年代、文化層などの名前を付けるきっかけを与えた遺跡のこと）としても知られています。須和田遺跡を最も特徴づける遺構として、すり鉢形の土抗があります。考古博物館でも、須和田遺跡から出土されたすり鉢形土抗を多く見つけることができました。遺跡を記念して、弥生時代後期の復元住居・竪穴式住居が建っていましたが、不審火により燃えてしまっていることができませんでした。現在は、緑の木々に囲まれた美しい公園である須和田公園。かなりの遺構が失われていて、残されている遺跡もごくわずかであることが残念ではありますが、この公園の自然と共にできる限り守られていってほしい、と心から思うことができる一日になりました。

真間の手児奈について

橋 本 尚 子

一 はじめに

市川市は、手児奈霊堂や真間の継橋、真間の井など、手児奈ゆかりの地である。真間の手児奈は、市川市真間に古くから語り継がれてきた伝

説の美少女で、文献での最初の登場は、日本最古の歌集『万葉集』である。手兒奈は、『万葉集』で高橋虫麻呂や山部赤人、および東歌などに、「遠き代にありけること」として詠われている。

二 『万葉集』の手兒奈

高橋虫麻呂の歌は、手兒奈を詳しく描写している。伝説を詠んだ歌人として知られる高橋虫麻呂の歌は、リズムよく叙事的だ。

手兒奈は、粗末な麻の着物を着ており、髪を櫛で梳かすことすらなく、杳も履いていないという貧しい娘である。しかし、大切に育てられた良家の娘でも、手兒奈の美しさには及ばず、「望月の足れる面わに花のごと笑みて立てれば夏虫の火に入るがごとく港入りに舟漕ぐごとく行きかくれ」というように、手兒奈が満月のように、咲く花のように微笑めば、夏の虫が火に飛び込むように、港には舟が集まり、男たちが求婚した。そのため、手兒奈は、「身をたな知りて波の音の騒ぐ港の奥つ城に妹が臥やせる」と、身のほどをわきまえて、海に入水してしまう。

これが虫麻呂の手兒奈である。この歌の反歌では、手兒奈が水を汲みに真間の井へ通ったことが詠われ、手兒奈の姿をいつそう鮮やかにしている。『万葉集』には他にも、男たちが手兒奈を求めて渡ったという、「真間の継橋」のことが詠まれており、後世に、手兒奈伝承の欠かせない場面として詠い継がれていくことになる。

三 手兒奈の歴史

手兒奈伝承は、話を膨らませ、『万葉集』以後その姿をさまざまに変容させた。特に、手兒奈は近世になって、市川を訪れた文人たちによって、俳句や和歌に詠まれるようになる。現代では、俳句や和歌は勿論、音楽

や美術のモチーフとしても活躍している。また、手兒奈は、真間山の日与上人によって手兒奈靈堂に祀られ、良縁成就・孝子受胎・無事安産・健児育成の神となっており、長い年月をかけて、手兒奈が市川で息づいてきた歴史を感じさせる。

四 むすび

手兒奈伝承は、市川市に根付き、愛着を持って遥か昔、万葉の時代から語り継がれてきた。市川市の人々は、手兒奈を市川の文化の象徴として大切にしている。

平成二年・西暦二〇〇〇年に、市川市を文化芸術都市にしようという試みから、ミレニアム文化振興事業「手兒奈フェスティバル」が実施された。手兒奈の人氣は、市川市の文化・芸術のシンボルマークになったことから窺えるだろう。